町長室からこんにちは No.99

一宮町長
馬淵 昌也

先日、稲荷塚の明法院で七弦琴の演奏を聞く会が開かれ、わたくしも伺いました。これは武井欲生先生が主宰される、日本古琴振興会の方々が年来開いているもので、すでに11回目であるとのお話でした。

七弦琴とは、もと中国の楽器で、現在の中国では「古琴」とよばれます。『論語』などにも「琴」という名でよく出てくる古い楽器です。日本でふつう「こと」と呼ぶものとは違うものです。日本の「こと」は1メートル80センチほどと随分大きいですが、七弦琴はずっと小さくて1メートル30センチ弱です。日本の「こと」の弦は13本ですが、七弦琴は文字通り7本です。また、七弦琴には琴柱がなく、爪をつけずに弾くところも違います。

この七弦琴はアミューズメントの音楽というより、演奏者が自らの心を正しく維持するよすがとして用いられるという伝統があります。「琴」は「禁」と音通であって、人間のよこしまな心の発生を禁ずるために演奏するというのです。特に儒教の知識人は、常に七弦琴を演奏することで徳性をかん養することが求められていました。

日本でも、七弦琴は過去に二回流行したことがあります。一回目は平安時代で、貴族の間に人気を博しました。有名な『宇津保物語』の前半は、七弦琴の演奏の秘伝が重要なモチーフになっています。江戸時代には、文化人の間に広まり、有名な南画家の浦上玉堂をはじめ多くの著名人がその演奏をたしなみました。

わたくしは、高校生の時に、李白の「山中に幽人と対酌す」という漢詩を学んで、「我酔うて眠らんと欲す君しばらく去れ、明朝意あれば琴を抱きて来たれ」という句の「琴」は、日本の「こと」とは違う中国独特のものだということを知って、是非聴いてみたいと思いました。しかし当時は身近に音源はなく、大学生になって香港に行った時に、初めて七弦琴のカセットを見つけて演奏を聴くことができました。緩急自在、激しい抑揚があるダイナミックな曲ばかりで、確かに日本の「こと」とは全く違うものでありました。

かつて日本では耳にすることも難しかった七弦琴が、この房総の一宮でも実際に演奏され、耳を傾けることができるようになったのか、と時代の変化に、感慨を覚えたひとときでありました。